

# スノーボードの遊びから

上坂元 絵里

一人ひとりの発想から始まる

四歳児二月のある日、発想が豊かなK児と、彼と一緒に遊ぶことの多いA児が、スノーボードを作りたいと言い出した。

私は段ボールを用意し、二人と相談しながら作り始めることにした。ボードの形を描き、本物の感じを出

したいと思い、その子どもの名前をローマ字で書いて魅力的にしてみました。

形を描き終わると、K児は万能バサミを使って自分で切り始めるが、A児の方は「僕は切れない」と言うので私が手伝って切る。

三学期のこの時期、子どもたちはそれぞれに自分の遊びを見つけて楽しむようになっていたので、スノー

ボードを作りたいと言われたとき、他の子どもたちの作りたいという要求が集中することは、ほとんど想定しなかった。むしろA児のボードを作るときには、使っているうちに折れてしまうことがないようにと考えて、二枚重ねにして頑丈に作ったほどだった。足を固定する部分は太いゴムを使うことにする。以前にスキー板を作った際、段ボールで作ったら、足の大きさと長さの調節が微妙で、しかも壊れやすかったという失敗経験があったからだ。使って遊び続けて欲しいから、使いやすいものになるよう工夫をした。

初日は二人が作り上げて廊下で使ったりして終わったが、予想に反して翌日から一週間以上にわたって、多くの子どもたちが次々と作りたいと言うことになった。

私は大慌てで段ボールにボードの形を描いて、子どもたちに自分で切るように渡す。段ボールを切るのには、四歳児の子どもにとって、力も要るし相当大変な

作業である。しかし、手伝おうにも作りたいという要求が次々に続くので、切るところまでとても手が回らない。後から考えると、形を描くのも子どもにも委ねても良かったのでは？ その方が、子どもらしい物が出来あがったのでは？ という思いもある。

しかし、その時は「先生、切れない」と訴えられても「先生、手は二つしかないからとても切ってあげられないわ」と応えるしかなかった。子どもによってはさみの先を刺してブチブチと穴を開け、形はデコボコになりながらも何とか切って（殆ど引きちぎる？）いた。「欲しい、作りたい」と強く思うと、必死で、何とか今出来るやり方で形にしようとする姿がみられる。頼もしいたくましさを感じ、微笑ましくもあった。途中で諦めたり中座してしまったりした人は、ほとんどいなかったものの、中には作っただけの人もいた。そのことから、遊びへの思い入れの深さ、集中継続の仕方の個人差を理解することもできた。

スキー場へ行つた経験やオリンピック等のイメージから、子ども達はボードの上面をカラフルに色付けしたり、旗の絵を描いたりして、それぞれに自分だけの素敵なマイボードを仕上げた。

苦勞して丁寧に作りあげただけに、自分が作ったボードへの愛着も深かつたようである。スノーボードを小脇に抱えて園内を歩くのも、誇らしげで嬉しそうであつた。後日談だが、年長に進級した六月の初めに、男児が数名お山でボード滑りをやりたいと言ひ出す。年中児が同じように作つて遊びたいという影響を考えると、時期が少し早いのではと担任は考えたのだが、その中の一人U児は、翌日スノーボードを家から持参し「これを使って滑る」と言つてきた。大切に保管していたことが確かに伝わつてきて嬉しいことだつた。

### 「遊戯室のスノーボー

#### 下場」

二日目に取り組んだY児、D

児たちは、ボードを作り上げる

と遊戯室に出かけ、大型積木と

板でスノーボードの遊び場を作ろうとする。板を斜め

にして傾斜を作ろうとするが、斜めにした板を固定す

るやり方がうまくいかず、板がずれてしまう。とても

滑る事はできないし危ない。それを見て、私の方で斜

めにした板の先に、板や積木を置いて固定するやり方

を示してみる。滑る板の長さは短く角度も小さいが、

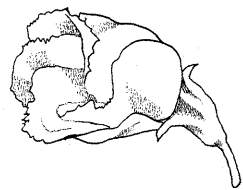
手作りのスノーボードで滑ると何だか本物の感じが出

る。スノーボードは片足につけていたので、もう一方

の足でスピードをコントロールすることも出来るの

で、見ていて危ない感じもなく安心する。

少し時間がたつてから様子を見に行つてみると、斜



面の周りを取り組むように場が出来ていて、スノーボードを足につけた子どもたちが数人、並んで順番に移動して、滑るのを待つようになっていた。先ほどと比較すると場が広がり、六、七人の子どもたちがいて、ずいぶん本物のスノーボード場らしくなっていた。

翌日以降も登園するとすぐに遊戯室に出かけ、スノーボード場を作る遊びが続く。最初の二、三日は、Y児を中心とした場作りであったが、その後はM児やT児といった女兒が中心となっていく。遊びのメンバーが変わっていても、板で斜面を作る場作りの手法は、初日から受け継がれつつ、微妙に変化していった。さらに、性差に影響を受けず一緒に混じりあって遊べるというのも、いいなと感じたことのひとつであった。

S児は唯ひとりスキー板を作る。自分の主張がある。出来上がると張り切ってスノーボード場で滑ってみたものの勢いよく転倒してしまい大泣きする。ス

キーの場合は、新聞紙を丸めて作ったストックでは勢いを止められずスピードが出てしまった。私も気がつかなかったことで、痛い思いをさせて申し訳ないと思いつつ、微笑ましくもあった。

### 遊びの中のテーマ「滑る」

六、七年前、アニメの影響で、子どもたちが「ミニ四駆」と呼ぶミニカーを作って、さまざまコースで走らせて遊ぶことが大流行した。その後、車を走らせる遊びが変化して、いろいろなキャップや円筒上のもの（セロテープの芯等）を「転がす」遊びへ転換し、長い期間遊びが続いたことが印象に残っている。

今回のスノーボードの遊びは「滑る」ことがテーマである。幼稚園の環境を見渡すと、園庭には 何種類かの滑り台・築山等、滑って遊ぶ場が沢山ある。三歳児にとっては小さい滑り台の階段を上ったり滑りおりたりすることだけで大冒険。それが四歳児になると、

滑り台を下から登ってみたり、寝転がって滑りおりてみたり、様々からだを使いスピード感を楽しむようになる。さらには、バケツに入れた水や砂を運びあげて滑り台を落としてみたり、困ったことが起きたりもする。園庭の築山は十年近く前に作られたが、草が生えるようにしたいと種を蒔いて努力しても追いつかないほど、子どもたちの遊び場として活用されている。

現在はかなりツルツルの泥山で、滑りながら登る緊張感、走って降りてくるダイナミックな心地よさを、保育者も子どもたちと一緒にしばしば体験している。段ボールを持ち出しての築山滑りも、子ども達の定番とも言える遊びである。

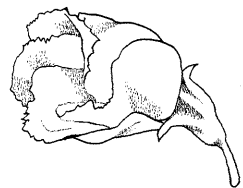
今回のスノーボード作りは、段ボールや綺麗に彩色できるペンを材料として製作する素材体験から始まったが、この四歳児達も、築山を段ボールで滑る遊びを体験していた。子どもにとって、興味深い「滑る」というテーマが、この遊びの展開の一つの大きな要素で

あったと感じる。「転がす」「滑る」等、子どもが興味を持ち、いろいろな素材・材料と関わる、多様な人や場と関わる体験が可能なテーマは、保育の中で大切にしていきたい。

一方、このような遊びの展開だと、誰がいつどのように関わったのかを記録に残すことが難しい。参加するきっかけ、同じときに遊ぶことでの出会い、一緒に場にながら関わりはほとんどない等、細かく見取れば多くのことが見えてくると思うのだが、大きなきっかけを作った人や場面の転換等は追えても、なかなか細かいところまで捉えきれないジレンマも強く感じさせられた。

### 遊びが展開する要素

最初の数日は、家に持って帰ることは我慢してもら





▲大型積木と板で作ったスノーボードの遊び場

う。一生懸命作った物を持ち帰りたいという思いは充分に分かりつつ、作った物を使って繰り返し遊んで欲しいという願いを込めた判断をとった。「どうしてもお母さんに見せたい」と言う子どもには、降園時に見せて園に置いていくよう伝えた。多くの子ども達も作ったボードを収納するために、保育室には沢山のボードが入る。その中から、自分のものを見つめるだけでも結構難しい。時々「私のスノーボードがない」と訴えられて、探してあげることはあったが、さすがにこの時期、自力でよく見つけだすと感心したこともあった。遊びの始まりの時点で、保育者の願いを明確に出したことが、繰り返し遊ぶ、遊びが継続するということにつながったと思う。

スノーボードは、基本的な作り方は共通でどの子どもイメージしやすく、その中にそれぞれに工夫する余地もあった。色を塗りながら話をしたり、塗るのをお互

いに手伝いあったり、小さい組にボードを貸してあげたり、作る・遊ぶ両方の過程でいろいろな関わりが生まれやすかったということもある。

・友達が始めたことを面白そうと思い自分もやりたと思う。・一生懸命自分の作品を作り、その結果できあがった物に愛着を持って大切に作る。・子ども同士が関わり合いを持てる場が出来、いろんなメンバーで繰り返し楽しむことができる。逆の言い方をすれば、四歳三学期という時期には、遊びを継続し多くの仲間と場を共有して関われる力が、子ども達に育っていたのであろう。

「滑る」という遊びのテーマ性に加えて、このような要因がいくつか絡み合って遊びの盛り上がりにつながったのではないだろうか。

### さらなる育ちへ向けて

この時期、子どもたちは園生活において安定感を持

ち、それぞれに自信を深めてきている。周りの友だちがどんな人か、何をしているのかに目を向けるゆとりも出てくる。子どもの興味や発想を生かして教師が後押しをすると、驚くほど集中してダイナミックに遊びを展開できることも珍しくない。ただ、これまでの自分の保育経験の中で、この四歳児後半の素直に伸びる芽を、そのまま年長の生活の中で伸ばしていくことの難しさをしばしば痛感する。

遊びの流れを振り返り、様々に考えてみることで、これからの遊びを支え充実させていく教師の関わりを考える上で多くの示唆を含んでいる。スノーボードの遊びを通して、子どもたちの育ちを実感し頼もしく思うと共に、今後の子どもたちの更なる育ちに関わっていきたいと願っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)